

▼▼アルカディア学報▲▲

539

客員研究員 土持ゲリー法一（帝京大学高等教育開発センター長・教授）

2
0
1
3
.
11
.
20

そもそも、一般入試とAO入試は性質の違うも

のである。AO入試には学力だけではなく、総合力と多面的な評価ができるというメリットがあるはずである。AO入試を一般入試と同じように扱うから学力低下などの批

判につながる。アメリカの大学はAO入試で入学者を決める。AOはアドミッション・オフィスの略で、アメリカの大学では入学者選定に半年から一年の期間をかけて高校生の多様な資質を選ぶ専



土持氏

かる重要な業務である。AO入学者の多様な学力を引き出すには、アクティブラーニングが効果的である。今後は、各大学

がこれにどのように対応できるかが問われる。あつたことから考えれば

二〇〇八年に大学設置基準を改正して大学にFDを義務づけ、教員の教育力の向上を目指したが、成果は得られなかった。それは、各大学にFDを推進する専門職の不足が原因とされている。これによって日本の大学におけるFD活動は大丈夫なのかと危惧せずにはいられない。

アカルティ・ディベロップの人材が不足したからである。国は大学にFDの義務化を打ち出しながら、それを推進するフナカルティ・ディベロッパでも「パラダイム転換」の動きが目立ち、高等教育は変革期に直面して混沌としている。中教審答申が提言するようなアクティブラーニング

アクティブラーニングを促す反転授業

AO入学者に効果的

バーの養成を怠ったことが、教員の教育力向上の促進しようとするれば、従来の授業改善とは異なったアプローチが必要に低下を招いた。今年もフ

アカルティ・ティベロブメント(FD)に関する最大規模のPODネットワーク年次大会が、二〇

一三年十二月六日、十日
までピッツバーク市のオ
ムニ・ウィリアム・ペ
ン・ホテルで開催され
リカでは、一九七〇年代
から一九八〇年代にかけ
てファカルティ・ディベ
ン・ロブメントが盛んにな

た。参加者は総勢七四三名であったが、日本からは六名であった。二〇〇年頃から注目された。一八八〇年のFD義務化の直後九四〇年以降になると

「パラダイム転換」の現方法に満足していない。象が起こりはじめた。すなわち、教員は、教室

なわち、ハラダイム転換とアクティブラーニングが一緒に、教育と学習を改善する新しい動きが出てきた。その結果、ハイブリッド学習やフレンドリー学習という新しいものが反転授業であ

しい学習方法も生まれた。伝統的な授業では、教員と学生が同じ教室で学んだが、教室をもたないオンライン授業も生まれた。その両方をミックスする。学生が事前学習をしたことを前提に教室内授業が行われる。すなわち、教室内では授業をすることが目的ではなく、フィードバックが中心に

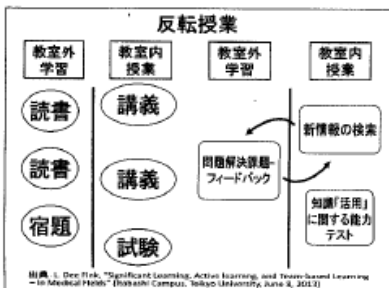
グを促す反転授業

人学者に効果的

転授業（フリック）という言葉も聞かれる。反転授業について、フィンク博士は下

記の図表を用いて、教室
内授業と教室外学習とに
分けて説明している。伝
統的な授業では講義を行
って導入することで、ア
メリカでは、反転授

い、学生に読書をしたり、クティフラーニングを活用したり、宿題や問題を解いたりして性化させている。TBLの特徴は、授業の初めからの試験を受ける。多くのチーム編成が重要になる。このような教育教員は、このような教育



礎材料として使われている。

前述のPOD
ネットワーク年
次大会のPlenary Session
で、Adrienne Kozal、University of South California,
"The Risks and Rewards
to Promote Student Engagement"
と呼んで促進している。

今内での認知度も高まり、多くの教員からSCOTへの依頼が増えている。

SCOTの詳細については、同センターPを参照。現在、CTLでは、"Promotion of Student Engagement"のスローガンを掲げ、これを"POSE"と呼んで促進している。

る。編成は学生にさせるのではなく、教員が周到に計画して準備する。反転授業はアクティブラーニングを進める上で優れた方策であるが、これは学生が事前準備をしてこないと成立しない。したがって、学生が事前準備をしたかどうかを確かめる(準備確認試験(Readiness Assurance Test, RAT))が不可欠となる。さらに、チーム内の個々の学生をどのように評価するかという問題もある。アクティブラーニングや反転授業を最適なものにするには、教員と学生双方の意識改革が必要である。

アクティブラーニングを推し進めるには、教員から学生へ、教育から学習への「パラダイム転換」が必要である。アクティブラーニングの鍵となるのが、“Student Engagement”である。二〇二一年度POD研究助成を受けたプロジェクトがボスターセッションで紹介された。“Student Engagement”は、大講義室ではできにくいと考える教員が少なくないが、教員がアクティブラーニングを促す具体的な行動を学生に取らせることで可能になるとの研究成果が紹介された。アメリカでは、“Student Engagement”を尺度として大学を評価するNational Survey of Student Engagement (NSSE)が急速に拡大し、カナダ版も作成され、その結果が他大学と比較され、予算配分の基

of Becoming a Campus Change Agent”と題する講演があった。タイトルからも明らかのように、ファカルティ・ディベロップパーは、教員と学生の中間に位置する“Change Agent”の役割をする。帝京大学高等教育開発センター(COET)は“Student Engagement”の重要性を認識し、SCOTT (Students Consulting on Teaching)を導入している。これは学生視点で授業を改善するといふもので、“学生による授業コンサルティング”と呼ばれる。同センターでは、SCOTTを「パラダイム転換」の“Change Agent”と位置づけている。最近